2020 年の中国の新年：ねずみ年

中国の十二支は、各年をそれぞれ特定の動物と結び付けた 12 年で一巡するサイクルで構成されています。その年に生まれた人やその年自体が、対応する動物の資質を表していると信じられています。2020 年は、太陰暦によると、中国の新年は 1 月 25 日土曜日となります。この日は、中国の十二支の最初の動物であるネズミの年の始まりを知らせます。

ねずみ年生まれの人は、鋭い観察力、前向きな姿勢、そして柔軟なマインドを持っていると言われています。その性格は社交的で陽気です。彼らは困難に直面すると、大胆で肯定的な特性が浮かび上がります。とりわけ、周囲の状況を迅速に評価し、変化する環境に自分自身を適応させることができます。

ネズミの競争

シンドゥ・ポーターによる再話

秩序の女神、ヌ・ワが地球界に降臨し、人間を創造したのは、有史以前のことでした。仕事が終わり、彼女は夫である天帝の宮殿に帰りました。ヌ・ワは最初に地球を訪れた際に、明るい太陽と豊かな雨が大地に触れて慈しんでいるさまに注目しました。女神には、この世界は実に奇跡だと分かりました。

けれども、帰るや否や、ヌ・ワは天帝から驚くような命令を受けました。直ちに地球に戻り、天空に引き裂かれて開いた大きな穴をふさぐというものです。ヌ・ワはどのような方法を使っても、急いで修復しなければなりませんでした。

神の力を使って、ヌ・ワは色鮮やかな石を精錬しました。裂け目を埋めるのです。そのために、彼女は「地球亀」の4本の足を使って天を支えました。それは劇的で実際的な解決策ではありましたが、この地球の構造に対する大胆な調整は、全世界をガタガタ揺らすほどの大地震を発生させました。大地は崩れ、続いて大洪水が起こりました。地球の海があふれ、浸水が起きたのです。ヌ・ワが尊重していた人間界は、突如として途方もない災難に直面していました。

天帝は、洪水を封じ込め、それによって人類が滅びるのを防ぐよう、水神に命じました。大変な努力で、水神は水を抑えることにほとんどは成功しました。しかし所々、洪水はいまだ激しく起きていました。人間は疲れ切り、もはやその流れを打ち砕く強さはありませんでした。

一瞬の稲光の中に、地上の至る所に住んで、そこを守り、大切にしている膨大な数の動物たちが、水神の面前にビジョンとして現れました。それらの動物たちは皆、安全を求めて、すでにさまざまな山の高い場所に避難していました。そうだとしたら、水神はどのように彼らを見つけることができたのでしょうか。忙しくて仕事から離れられない彼は、助手のユに、動物たちを見つけ出して助けを求めるよう指示したのです。

地球を救うために無数の動物たちを集めるという大変な仕事に直面し、ユは祈りました。「地上のあらゆる生き物たちが最も高い山々の峰の安全な場所へと全速力で駆け上がりました！どうやったら彼らをここに連れてくることができるでしょうか」。彼は、どう取り掛かったらいいのか全く分からず、尻込みしました。

するとその時、ユが見下ろすと、下の地面に1匹のネズミがいることに気がつきました。そのネズミはパニックになって逃げて来て、立ち往生していたのです。ユは、こんな1匹の小さな生き物でさえも目にしたことで、急に自信を回復したように感じました。

同時に、このような重大な瞬間に、このみすぼらしい齧歯（げっし）類の動物が彼の前を通り掛かったことに、ユは驚きました。そして彼は、ネズミは人が生活している所で生きることを思い出しました。ネズミは、彼が水神を補佐するために見つけられた、たった一つの生き物でした。そこで、ユは手を伸ばしてそのネズミを捕まえ、彼のショールのひだの中に入れました。

刻一刻と洪水の水かさは増していきました。ユがほっとしたのは、彼の手の中で震えている生き物に水神の願いを伝えた後、この小さな動物への感謝の気持ちが千倍になったことに気づいたからでした。ネズミの側でも、自分をすくい上げた男は、思っていたほど悪意があるわけではないとすぐに分かりました。そこでネズミは、世界を救うために、ユを助けて、他の動物たちを集めることに快く同意しました。

その知恵の回るネズミは、群れの仲間と一緒に、林の中や山腹に隠れているたくさんの動物を探し出しました。彼は、これらの援軍を目もくらむような高所から下へ先導するよう、動物の王であるトラさえも説き伏せました。大小さまざまな動物は、人間と協力して滝のように落ちる水を制御しながら、わずかに残っている乾いた土地の上を駆け回り、競うようにして走りました。

こうして、人間と動物は力を合わせて、ついに洪水を封じ込めました。水神の導きの下、恐れ知らずの性質を持つネズミが集めた勇敢な生き物たちによって、地球は救われました。彼らは一緒に、地上の美しさと多様性を守ることに成功したのです。

この畏敬に値する功績を記念して、天帝は声明を出し、居合わせた皆がそれを聞きました。彼は、地球を守るのに役立つ行動を取った動物たちに、永遠に続く栄誉を授けるというのです。天帝は、遠い場所に清らかな祭壇を用意したと公表しました。そこは、世界の未来を守った神聖な率先者たちをたたえる神聖な品々で満たされていました。

響き渡る声で、天帝が言いました。「競争において、その神聖な祭壇に到着した最初の 12 匹の動物は干支（えと）の 12 の神々となる。この日以降、彼らは毎年毎年、尊敬されるであろう！」

動物たちの競争が始まる予定の日の前夜、賢いネズミは待ち遠しい祭壇への道のりについて考えを巡らせました。彼は、最も効率のいい行き方を見極めるために、まず一つの道を走り、それから別の道を走りました。どうしたら、その神聖な祭壇に最初に到着することができるのでしょうか。

その時、ネズミは完璧な隠れ場所を見つけました――ネズミは雄牛のとても大きな角の湾曲の中に心地よく身をうずめました。雄牛に揺られて前進しながら、競争の間中、ネズミはそこにいて誰にも気づかれることはないでしょう。ネズミは一つ確かなことを知っていました。最強で、最も意志の強い動物である雄牛は、天帝の祭壇に他の誰よりも先に到着するだろうということを。

ネズミは考えました。「たとえ最初の十二支の神になるのが私であっても、雄牛は、美しく曲がった角の上に私が便乗したことに異議を唱えないに違いない。雄牛は誠実で動揺しない性質なので、私が優勝しても、受け入れてくれるだろう」。ネズミは、競争の結果に関係なく、自分の友は天帝に従い続けるだろうと知っていました。

美しく穏やかに夜が明けました。その日、昇る太陽の光は、ただならぬ輝きで地上を染めました。荒れ狂う水は静まり、そして大地は最近の危機的な出来事が去った安堵（あんど）で輝きました。

無数の鳥たちが、足と羽の音と共に優しく歌い始め、爪を持つたくさんの生き物たちが、いとおしいゴールに向かって動き出そうと準備しました。そこには、競争が始まる前の静寂の瞬間がありました。

ネズミがまさに予期していたように、その朝、確かな足取りで集中した雄牛は早い段階で先頭に立ち、決して後退することはありませんでした。

そして、ネズミは全く予期せぬ行動を取りました。雄牛がきらりと光る祭壇に到達しようとするほんの少し前に、ネズミの足がぴくっと動きました。流れるような動きで、彼は隠れていた雄牛の角の下の場所から現れたのです。鮮やかに前方に飛び出すと、ネズミは祭壇の上にある桃色のシャクヤクの花瓶の横に、勝利の鳴き声を上げながら着地しました。

集まった群衆は、雄牛を熱烈に称賛することから、ネズミのぼうぜんとするような達成に驚いて頭をかくことになり、衝撃を受けました。ささやきが野原中を伝播していきました。「ほとんどの道を他の動物の角に隠れていたネズミが勝利したことに正当性はあるのか」。正直なところ、誰もネズミが賞を獲得する可能性があるとは考えていませんでした。

というのは、彼の数ある長所にもかかわらず、ネズミはどういうわけかその競争に参加している他の動物と比べて劣っているように思われていました。人々が頭の中で彼を不適格と見なすのは、その大きさのせいだったのでしょうか。あるいは、悪賢く抜け目ないことで、立派な評価を得られないからでしょうか。事実、ネズミはこの特性のために、何世紀も耐えてきたのです。

結局、誰もネズミが天の祭壇に最初に触れるために思いついた巧妙な方法を否定することはできませんでした。ネズミは天帝の唇から直接発せられた布告を満たした者であると見なされたのです。ネズミは十二支の悠久の輪の最初の動物に指名されました。目ざとく、聡明で、順応性のあるネズミは、再び自分が巧妙な手品師であることを示したのです。

さらに、彼はあふれんばかりの前向きな性質を見せたため、天帝はネズミの厚かましさを許していました。天の形勢はネズミに有利に展開し、彼はその日から揺るぎなきチャンピオンとなりました。

天帝は、決然としてこの成果にすべての動物たちを褒めたたえました。彼があの日に発した宣言は決して変わることはありません。ネズミは誰もが欲しがる地位を正当に与えられ、十二支の輪を動かす最初の動物として宣言されました。その小ささと悪賢い手段にもかかわらず、ネズミは地球の他のどの動物よりも上に位置することになったのです。

天帝の命令は満たされたようです。動物たちの競争は決しましたが、誰の功績が皆の心を捉えたでしょうか。誰の物語が不滅のものとなったでしょうか。そう、あなたのご想像通り、ネズミです！　今日に至るまで、ネズミの成し遂げたことが皆の記憶に残り続けているのです。

ねずみ年に生まれたすべての人は、自らを幸運であると考え、その賢さや前向きさ、順応性、回復力、そして観察力の鋭さを受け継いでいることを喜ぶべきでしょう。

© 2020 SYDA Foundation®.著作権所有。